

第 18 回米百俵賞受賞

(平成 26 年 6 月 15 日表彰)

**内藤 眞** (新潟市)



ミャンマーの医療関係者育成のため、両国の医学生、医師同士の交流を促進し、両国大学間での共同研究ができる体制を整えた。

#### ■受賞時プロフィール

内藤氏は、ミャンマーの劣悪な医療事情を知ったことをきっかけに、現地の医療環境の改善に向け地道な支援活動を行った。

現地訪問の際、氏は安定した電気の供給が確保できない暗い病棟に患者があふれ、半世紀前の顕微鏡で病理診断をしている状況を目の当たりにした。また、現地の医師自身の給料を患者の治療費に充てている現状を知り、支援を決意。氏の活動に賛同する 100 万円の寄附を受けたことを機に、平成 14 年「ミャンマーの医療を支援する会」を設立し、活動を開始した。

軍によるクーデター後に、同国への日本を含む世界各国からの支援が中断される中で行われた医療支援活動、特に、不足している顕微鏡等の医療器具、結核に対する薬剤、日本の最新の医学書等の物資の提供は、困難を伴うものであったが、現地にとってはかけがえのない活動となった。



▲平成 16 年 ヤンゴン総合病院に顕微鏡を寄贈

さらに氏は、平成 15 年の S A R S（重症急性呼吸器症候群）の流行を機に、当時ミャンマーになかったインフルエンザ調査のできる体制づくりを画策し、同国保健省と提携し「ミャンマーのインフルエンザ研究拠点」プロジェクトを遂行、研究成果を世界発信できるようにした。氏の働きかけにより、平成 17 年には保健省と、氏が教授を務める新潟大学との間で協力連携協定の締結に至り、継続的な活動の礎を築いた。

以後、医学生物学ワークショップを両国で開催するなど、ミャンマーでの研究成果や日本の最新研究の発表を通じ、医療技術の向上や両国医師、学生の交流・親睦を深めるなど、場の創設にも尽力した。

民主化に動き出したミャンマーに未だ残る厳しい医療環境に、氏が作り上げ

たネットワークや行政と連携した取り組みが、現地の医師の活動を支え、多くの医師、学生の技術・意識向上、ひいては、同国の医療の質の向上につながっている。

### ■受賞後の活動

平成 28 年、これまでの活動実績とミャンマーとの強い絆が評価され、日本がアジア・アフリカで展開している「感染症研究国際展開戦略プログラム」のミャンマー拠点として、ヤンゴンの国立衛生研究所内に新潟大学感染症研究拠点が設置された。

氏は受賞後も毎年ミャンマーを訪れ、活動を続けている。平成 26 年には米百俵賞の副賞を教え子の働く病院に届けたほか、翌年にはサイクロンの被災地を支援するため、抗生物質と支援金をミヤ



▲平成 19 年 新潟大学でのミャンマー人研究者の研修



▲平成 29 年 第二医科大学中央研究所に抗体を供与

ンマー保健省等に届けた。その後も顕微鏡や病理の免疫染色に必要な抗体をヤンゴン総合病院をはじめ複数の病院に供与。平成 31 年には新潟ロータリークラブと共同でサンピュア病院に超音波検査装置を寄贈した。こうして令和 2 年、氏のミャンマーでの活動は 20 周年を迎えた。

このような支援を継続している中、新型コロナウイルス感染症が発生。ミャンマーでは、新潟大学との長年にわたる感染症の共同研究によって検査体制は整

備されつつあったが、令和 3 年 2 月、軍が国家の全権を掌握。支援したくても入国はおろか、送金も困難な状況に陥っている。氏は「事態の沈静化を待ってミャンマーの医療向上のために活動を続けていきたい」と語っている。

#### ■主な受賞歴

- 平成 19 年 日本病理学賞
- 令和 2 年 新潟日報文化賞（社会活動部門）



▲令和元年 超音波検査の実習の様子